
リリカルなのは 黒い月の聖王

暴王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 黒い月の聖王

【Nコード】

N2703W

【作者名】

暴王

【あらすじ】

古の影に生まれし虹を纏う失われし王。時を越え無限の欲望を打ち砕かん。

転生者でない聖王と霸王の子供がStrikersの時代に送られる話。ヒロインは一樣キャロの予定なのでエリキャロ好きの人はUターン。いろいろな人の二次創作を見てチャレンジしました。初投稿なのでつまらない可能性大です。タイトルを微妙に変えました。

人物設定（前書き）

一様載せました、随時更新する予定です。

誤字脱字気になる点があつたら教えてください

9 / 2 1 霸王流式式 レグルス 追加。

人物設定

シルバ・ゼーゲブレヒト

容姿

金の首もとまである長髪を後ろで束ねている

現在は指輪で髪を黒くしている

右目が青 左目が緑

イメージはFateのセイバーの目を虹彩異色にして少し幼くした感じ

武装形態時はそのまま成長した姿

バリアジャケットはクラウスの服からマントを無くしたもの

ステータス

魔力値 A A A

魔力光 虹

魔力変換 暴王

レアスキル 聖王の鎧

性格

結構やんちゃでいい加減だが、いざという時はかなり真面目になる
オリヴィエやクラウスをバカにする、もしくは冒涔するようなことがあるとすごくキレル

かなりのカリスマを持ち、いろいろな人を引きつける魅力がある
基本的に誰にでも優しい

オリヴィエやクラウス曰く「優しすぎるが、良き王になる器を持っている」

名前の意味はラテン語で『森』

霸王流

・断空拳

原作と同じ ただし完成版

・旋掌破

原作と同じ ただし砲撃を少し逸らせる

・震天掌

遠距離衝撃破 魔力を混ぜた空気を振動させる

・崩山拳

近距離衝撃破 攻撃した相手を内部にダメージを与える

霸王流式

シルバのオリジナル技、レグルスとのユニゾン時のみ使用可能

・紅蓮拳

レグルスの炎熱変換を利用 炎を纏わせた拳

・獅子紅爆炎拳

レグルスの炎熱変換を利用 獅子の頭の形をした超高密度の炎を纏わせた拳

暴王について

聖王家に稀に生まれる魔力変換

色は漆黒で球体をしている

魔力に反応して動き敵味方関係なく自動的に攻撃する事から『暴れ回る王の力』という意味で暴王

原作に出てくる夜科アゲハのとの違いは非殺生設定が出来る上に特定の相手の魔力だけに反応するようにが出来ること

シルバはまだ使いこなせておらず膨大な魔力が必要なため魔力特定

を使用する余裕がないが：

・暴王の月

シルバの身長ほどある巨大な球体 基本的な形態で最も暴王の特徴が出ている

・暴王の流星

拳サイズの球体 無駄を無くしスピードに重点を置いた形態 そのため追尾が最初の一回のみになった 一番消耗が少ない

・暴王の渦

幾つかの頭サイズの球体をいくつもの輪で繋いで作った防御形態 一番消耗が激しい

・暴王の環

土星の輪に似たものを三つクロスさせた形態 敵を中心に展開した輪を縮めていき最後は敵を切り刻む

デバイス

レグルス

詳細

白い巨大なライオン。魔力消費を抑えるために普段は子猫

歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイス

歴代聖王の知識や記憶を保管する一種の図書館、記憶等を観覧は使用者と逆ユニゾンにより可能

身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にする

単体では炎の咆哮などをあげ攻撃する

人物設定（後書き）

シ「俺の髪って今、黒なんだ。」

暴「目は聖王と霸王の虹彩異色から片方ずつなんだよ。」

シ「なるほど。でレグルスの設定は？」

暴「もちろん…まだだぜ！」

シ「威張るな！」

ブログ（前書き）

短い、かなり短いしかも話進まない。
書いてる皆さんすげー。

俺、日本語あつてるかとても不安。
そんなブログ

プロローグ

時は古代ベルカ

後に最後のゆりかごの聖王となるオリヴィエ・ゼーゲブレヒトは、シュトゥラの霸王家に留学していた。

彼女はそこでクラウス・G・S・イングヴァルトと出会う。

お互いはいつ敵になるか分からない関係、しかし彼らはそんなことを気にせずに親しくなった。

留学してから暫く後にとある出来事が起きた。

共に武道家として接していたはずだった…。

お互い友だと思っていた…。

しかし、彼らは決して起こしてはいけない『間違い』を犯してしまった。

オリヴィエは子供を身ごもった。

お互いの家は共に生むことを許さなかった。

しかし、彼女は…二人は子供を生むことを選択した。

本来なら居るはずのない者。

聖王と霸王の血を継ぎし者…

彼の者の名は

シルバ・ゼーゲブレヒト。

・
・
・
・

すやすやと眠っている赤ん坊のを優しい目で見ながら二人の男女が話し合っていた。

「この子を安全の為にはなるべく見つかり難くて平和な場所で育てるべきでしょうね。」

「僕もそれに同感だ。」

シュトゥラの辺境の森の中に、僕の信頼の置ける人が治めている小さい村がある。そこに隠して育てよう。」

「なら私の顔見知りも居た方がいいわね。友人にそこで教育役と護衛を引き受けて貰うように頼んでみるわ。彼女なら安心して任せられるし。」

赤ん坊の頬を撫でながら返事をするオリヴィエに対し、クラウスはふと質問する。

「側近とか言わないよね？」

「もちろん言うわよ。」

「……なるべく僕たちの子供だとバレない方がいいんだけど。」

「いやよ。ママって呼んでほしいし。」

「……………」

クラウスの思考は一瞬停止するが、すぐに復活し質問する。

「そんな理由でバラすつもり？」

「冗談よ？」

オリヴィエはそっぽを向きながら答えた後、真面目な顔をしてクラウスを見据えて話し始める。

「真面目な話、例えばこの子に秘密にしていた所で、この子を襲う危険性は無くなるわけじゃないでしょう？」

この金色の髪に今まで存在しない組み合わせの虹彩異色、そして極めつけは虹色の魔力光。

これだけ揃っていれば分かる人には分かる。そうなった時にこの子が自分の親の事を…私たちの事を知っているか、知らないかでは危険度が全然違うわ。」

「確かに、この子は何処で過ごすにしてもかなりの危険が伴うね…
…決めた！この子には霸王流を教えよう！」

「私もなるべく顔を出しているんな事を教えるつもりよ。」

「よし。じゃあ今後の方向も決まった事だし村の方に連絡を取ってくるよ。」

そう言ってクラウドは走るように部屋を後にした。

部屋に残ったオリヴィエは、赤ん坊……シルバを優しくなでながら我が子の未来について考えるのだった。

プロローグ（後書き）

なんかホント皆さんすみません。
訂正とかあったらお願いします。

家族（前書き）

初戦闘……難しい

オリヴィエのキャラがおかしいですorz

家族

シュトウラ辺境の小さな村

頭に子猫を乗せた金髪の少年はうろろ歩き回りながら、金髪の女性
性は静に立ち村の入り口で誰かを待っていた。

「シルバ様、陛下達がいらっしゃるのは一時間後の予定なんですが

……」

女性：アリス・グラシアが、シルバに文句を言う。

「待ちきれないの！」

二人が一緒に来るんだよ！三人で会えるのなんて誕生日以外無かつ
たんだよ？」

「確かにそうですが……もう12歳でしょ？少しは落ち着いて下さ
い。」

「分かりましたよ。でも何で突然二人一緒に会いに来るんだろ
…やっぱり激化してる戦争関連かな？」

「多分そうだと思いますが…」

「もりかして聖王家と覇王家が対立したとか！？」

「其れはないと思いますよ。一様同盟国ですし…」

「じゃあ、俺に参戦しろとか？」

「其れこそありえませんよ。隠し子なんですから。

それと一人称は『俺』ではなく『私』にして下さい。」

「まあだからこの村にいるんだし。」

一人称はもう癖になっちゃてるから無理だと思うよ。」

「何で他人事なんですか…」

《Gaoooooo》

二人が話をしていると突然子猫：レグルスがシルバの頭から飛び降
り吠えた。

「陛下たちが来たみたいですね。」

「うん。何だかんだ言って二人も早く来たみたいだし丁度良かった

じゃん。」

「いや一時間半もここに居たんですから丁度良いも何も無いと思うんですが…」

「いちいちうるさい！こう言うのは気分の問題なの！」

二人がどうでも良いことで揉めている内に、いつの間にか二人の男女が二人のそばまで来ていが二人は気付いていない。

「だいたい、口調もそうだし何で一々畏まらなきゃいけないのさ！」

「だから幾ら隠し子でも王の血を引いているんですからその自覚を持って下さいと何度も…「ストープ！」！」

言い争いが終わらないと思ったクラウドが仲裁に入る。

「オリヴィエ陛下、クラウド陛下何時の間に…」

「貴方たちが揉めてる間によ。」

「父上！母上！」

「だから私のことは昔のようにママと呼んでは言ってるでしょ？」

「アリスに母上って呼びなさいって言われたけど？」

「ちよっシルバ様！何言ってるん「ふん」。どう言うことアリス？」

！？

アリスのシルバの発言に対し抗議しようとするが、虹色のオーラを纏った修羅の気配に最後まで言葉が続かなかった。

「いえ、あのですね…王の血を継ぐ者としての威厳とかを考えまして…その方がいいと思っただけです。はい。」

「ちよっと、OHANASIしよつか。」

「今なんか発音がおかしかったような…って襟首引つ張らないで下さい！シルバ様も笑ってないで助けて下さいよ！」

アリスはそのままオリヴィエに連れて行かれ見えなくなった。

「……父上、突然二人で来るなんてどうかしたんですか？」

シルバは笑いすぎて腹を押さえながら気になっていたことを聞く。

「ああ、これからのことで重要な話があるんだ。」

オリヴィエが戻って来たら話すよ。

…とりあえずまだしばらくかかると思うから、久しぶりに霸王流の

稽古をつけてあげようか？」

「ホント！じゃあ早く広場に行こ！」

・
・
・
・
・

「こっちはもう準備できたよ。何時でもどうぞ。」

「では、武装形態！」

光がシルバを包み、次の瞬間成長したシルバがその場に立っていた。
「行きます！」

そう言うときシルバは一瞬で距離を詰め左腕を下からクラウドスに向け振り上げる。

それをクラウドスは右手を添えるように受け止める。

それを予想していたシルバはそのまま左拳に体重を乗せるように力を入れて無理矢理振り抜く。

クラウドスは足に力を入れその場に踏みとどまり左拳をシルバの原に向け突き出す。

「霸王断空拳！」

シルバはそれを腹に力を入れわざと食らい、その力を利用して上に跳び、クラウドスの背中に降り立ちそのまま振り向きざまに右手で裏拳を打ち出す。

クラウドスはしゃがみながら振り返り裏拳をかわし攻撃に移る。

猛攻を受け後ろに下がり距離を開けたシルバに対し、クラウドスは声をかける。

「今のは良かったぞ、シルバ。一瞬食らうかと思ったよ。」

「そう言いながら、かなり余裕そうでしたけど…？」

シルバは返事をしながら再び近づく。

クラウドスがそれに対してカウンターを入れようとした瞬間、シルバは特殊なステップを踏み再び後ろを取り、右拳を打ち出す。

「！！」

「霸王断空拳！」

今度はシルバが断空拳を放つ。

その拳はそのままクラウスに直撃する。

決まった！とシルバが思った瞬間クラウスの拳がシルバの肩に突き

刺さり、シルバは回転しながら吹き飛んだ。

「いつもよりかなり早く一本取れたね。」

「一本取れたのは嬉しいけど痛い。かなり痛い。」

「技が決まったからって、すぐ気を抜くからだよ。」

これからは決まった後も気を抜いちゃ駄目だよ。」

「はい。」

いつの間にか試合を見ていたオリヴィエとアリスが近づいてくる。

「終わったみたいね。」

シルバ、かなり強くなったね。」

そう言いながらシルバを抱きしめるが…

「痛い！母上肩が！」

その行為がシルバの怪我を悪化させてしまう事になった。

・
・
・
・
・

その翌朝、シルバ達はイスに座ってオリヴィエ達が訪れた理由を聞いていた。

「では、やはりここに来たのは戦争の激化が理由ですか…」

「正確にはそれが理由の重要な話があるからよ。」

「重要な話？」

「ええ、私達からのお願い。」

シルバにこの戦争に巻き込まれない場所に逃げて欲しいの。」

「…別の世界ですか？」

「
いいえ。」

.....別の『時代』よ

家族（後書き）

続くって感じで

誤字脱字気になる点があったら教えてください

別れそして未来へ（前書き）

今回ちょっとだけ P S Y E N が
にしてもいつも短い o r z

別れそして未来へ

「別の時代ですか？」

「ああ、別の時代だ。」

シルバの呟きにクラウスが答える。

「ちよつと待つて下さい陛下！」

そんな事の出来る魔法聞いたこと有りません！

どうやって……」

「もうちよつと静かに話して。」

悲鳴に近い声で話すアリスをオリヴィエが遮る。

「あ、はい………って、これが叫ばすにいられますか！どうやって送るんですか！？」

「それは俺も気になります。説得より先にそれを説明して下さい。」

「分かったわ……これを使うのよ。」

そう言つてオリヴィエは布に包まれていた、角のある白い仮面のような物を取り出す。

「それは？」

「【時の旅人】、忘れられし都の秘宝。」

「！？」

「忘れられし都……？」

どこかで聞いたような……？」

「アルハザードの事だよ。」

唸っているシルバにクラウスが教える。

「ああ、あの伝説の………伝説の！？」

「【ゆりがご】と並ぶ約束の地の遺産よ。」

「………方法は分かりました。」

「じゃあ、貴方を送る理由を言うわね。」

「はい。」

「私たちはね、シルバに生きて欲しいの。」

いろんな所に行つて、いろんな物を見て、いろんな事をして、自由に生きて欲しい。

でもどうせなら、この時代の誰も知らない世界、未来の世界に生きて欲しい。

これは私達からのお願い。私達がシルバにして欲しいことなの。」
オリヴィエ達はシルバの瞳を見つめながら話す。

「お前は強くなった。もう自分を守ることが出来るほど。」

「俺はまだ父上にも母上にも一回も勝つてない！」

それに力も…、『暴王』も完全には使いこなせてない！」

「当たり前だよ、そんなに僕達は弱くない。」

その僕から一本取つたんだ。誇つて良い。

暴王だつて、もう暴走しなくなつたじゃないか。頼む…分かつてくれシルバ。」

「そんなの二人の我が侘だ！俺はみんなで居られればいい！」

「…正直ね、この戦争で私達が死んでしまうかもしれないの。我が侘でも良い。言うことを聞いて。このとおりよ。」

おもむろに立ち上がると二人はシルバに頭を下げた。

「…頭を上げて。そこまでされたら…もう断れないよ…」

シルバは泣きながら言う。

「ありがとう、シルバ。」

「でもこれだけは…聞いて欲しい。」

「何んだい？」

「一週間だけ一緒にいて…お願い。」

それを聞いたオリヴィエはシルバを抱き寄せて言った。

「もちろん、私達もそのつもりよ。」

・
・
・
・
・

一週間後、村の人達に挨拶を終え四人は村の外にある森中にいた。

「一樣、着いてからも正体はなるべくバレないようにね。」

「その仮面は使い捨てだから時渡りが終わると碎けるわ。」

「レグルスの管理は私の一族が代々引き受けますので、私の子孫を捜して下さい。」

「それとシルバ、これを」

「これは？」

「付けている間、髪の色を変色させる指輪だ。」

「ありがとうございます。」

そう言っているとシルバは指輪を付けてから三人と向かい合った。

そして誰とも無く全員同時に、こう言った。

「『『『元気だね。』』』」

別れそして未来へ（後書き）

後2話ぐらいで本編は入れるといいな（人事 オイ
次はキャラが出る予定。

誤字脱字気になる点があったら教えてください

到着（前書き）

ようやく原作キャラ登場

PSI発動！！

設定は後日載せる予定です。

到着

「……元気だね。」「……」

そう言い仮面を付けた瞬間、シルバは無重力状態にあるような感覚を感じ、そのまま気を失った。

・
・
・
・
・

シルバが目覚めて最初に感じたのは、激しい風と強い重力だった。そして目を開いて彼は驚愕した。

「何で空中なんだよ!？」

シルバの遙か下に海が見える。町中で無かったただけまだあったが、それでも海面に叩きつけられれば即死は確実な高さだった。

「身体強化で乗り切るは無理か…武装形態!全魔力『聖王の鎧』に集中!ついでに!」

「暴王の渦」

虹色のオーラを纏い、さらに黒い球体が、無数の環で繋がれて出来たドームが現れる。

そして…

「ウオオオオオオオオオ!」

ドゴオオオン

辺りに爆発音が響いた。

・
・
・
・
・

s i d e キャロ

ドゴオオオン

「ひゃう!?!」

「キユクウ!?!」

機動六課に来てばかりだった私とフリードは、訓練終了後に六課の敷地内を見て回っていたのだけど…

「すごい爆発音…訓練所の方からだ。

見に行こ、フリード。」

「キユクウ」

フリードの返事を聞くと私は走り出した。

s i d e o u t

s i d e はやて

「何事や!?!」

必要な書類の整理が終わり一息着いた時に、いきなり大きな爆発音が聞こえ直ぐにロングアーチに走り込んだ。

「訓練所付近の海上にロストログアの反応を確認、その後直ぐに消滅。」

「爆発の方は?」

「それについては現在不明です。どうしますか?」

「とりあえず、シグナムとヴィータに調査してもらい。」

「隊長達は?」

「待機や。」

「了解です。」

頼むで二人とも…

s i d e o u t

side キャロ

訓練所の端に着いた私は辺りを見渡していた。

「フリードなんか見える？」

「キユクウ…」

申し訳なさそうにフリードが返事をする。

「そっか…？あれ？」

ふと岸に何かが流れ着いているのが目に映った。

「あれって…もしかして人！？」

私は急いでその人に走り寄った。

「大丈夫ですか！？って、この男の子意識がない！？どうしよう！？」

「キユクウ！」

「取り敢えずみんなに連絡しなきゃ！」

side out

「八神部隊長！ライトニング04からの通信です。」

「キャロから？」

「八神部隊長！今訓練所に男の子が流れ着いていて！意識がないんです！」

かなりパニックを起こした様子でキャロが言った。

「！？男の子！？よし、直ぐシャルマルに行かせるからそこから動かんといてや！」

「はい！」

「シャルマル、聞いたっとな？」

「はい。直ぐに向かいます。」

一連の会話を終えはやては、ゆっくりイスに座る。

「八神部隊長…たぶんその男の子が…」

「分かつとる。」

「取り敢えず隊長陣全員に会議室に集まるように言うとして。」

「了解です。」

Side
シルバ

「あれ……どこ何処？」

俺は目覚めたら知らない布団の上で寝ていた。

「えつと確か：みんなと別れて：気付いたら空中で：それでここがどこか知らないが：助かったって事でいいのかな：？」

しかしホントにどこ何処だ？

「んっすう…」

「うん？」

何気なく隣を見ると……ピンクの髪をした女の子が寝ていた……一緒に布団で。

ガタン
ゴツン

「いつてえええええ！」

到着（後書き）

はやての口調が難しい……
誤字脱字気になる点があったら教えてください

出会い（前書き）

キャラとの初絡み…

誤字脱字気になる点があったら教えてください

出会い

side シルバ

「ごめんなさい！」

俺は今、顔を真っ赤にしたピンクの髪の女の子に謝られている。

「いや、もう大丈夫だよ。」

これは俺が勝手に驚いて作った怪我なんだから。」

「でも…」

「それに俺の心配してくれてたんでしょ？」

「そうなんですけど…」

どうやら、岸に流れ着いたおれをこの子が見つけたらしい。

そして冷たい海水で熱を出した俺を隣で看病していたら、いつの間にか寝ぼけて俺が寝ていた布団に入ってしまったらしい。

「それより君の名前は？」

このままでは無限ループに入りそうだったので、話を変える。

「あっ自己紹介がまだでしたね。」

私は時空管理局 機動六課キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。」

「時空間離国？機動六課？砂糖陸士？」

なんだそれ…どこの国だ？聞いたこと無いぞ…

「えっと…時空間離国じゃなくて時空管理局です。あと砂糖じゃなくて三等です。」

にしても時空管理局を知らないんなら管理外世界からの次元漂流者でしょうか…」

わくさっぱり分かんない！

「ごめん…最後の方、言ってる事が全然分らないんだけど…」

「あつすいません、気にしないで下さい。」

まあそう言うなら良いか…あつ

「俺の名前を覚えてなかったね。俺は…」

ちよっと待てよ。

確か分かれる前に正体なるべくバラすなって言われたな…

「どうしたんですか？」

「えっ何でもないよ。」

俺の名前はシルバ。よろしく。」

「はい！よろしくお願いします！」

騙してるみたいで悪いななんか…

ガチャ

「もう起きとつたんか。」

side out

side はやて

昨日の少年の元に行こうとしたら、病室から話し声が聞こえてきた。

ガチャ

「もう起きとつたんか。」

「八神部隊長！おはようございます！」

「おはようさん、キャロ。」

少年と話したんはキャロか…これは面白い話題になりそうや…

つと、いかんいかん、今はこの少年に話を聞くのが先やな。

side out

「初めまして。」

うちは、時空管理局 機動六課 部隊長の八神はやてや。よろしゅうな。」

「俺はシルバです。よろしくお願いします。」

「早速やけどシルバ君に聞きたいことがあるんやけど…」

「あの私席外しますね。」

「ありがとう、キャロ。」

キャロが病室を出るとシルバが先にしゃべり出す。

「すいません、先に俺が質問して良いですか？

なるべく早く会いたい人が居るんです。」

「了解、で誰や？」

「アリス・グラシアさんの家系の人です。」

グラシアと聞いてはやての頭に一人の女性が浮かぶ。

「アリスさんの家系かは知らんけど、グラシアは一人知り合いに居るで。」

「ホントですか！」

「ホンマや。今連絡取ってみるは。」

そう言うとはやての前にモニターが出てきた。

「どうかしましたか？騎士はやて。」

モニターに短い髪の女性が写る。

「すんまんけど、カリムいるか？」

「はい。今、代わります。」

そう言うとはやては金髪の女性が写る。

「どうかしたの、はやて？」

「それが…アリス・グラシアの家系の人に会いた…なんですって！？その人、今其処に居ますか！？」

「うん…居るで。代わるか？」

突然のカリムの気迫に圧されながら、はやてが答える。

「お願い。」

「えっと…あなたが？」

シルバはモニターに写るアリスそっくりの人物に質問する。

「はい…アリス・グラシア直系の子孫、カリム・グラシアと申します。」

お会いできて光栄です。

……聖王陛下。」

「はい？今何って言ったんや！？」

はやては目を点にして聞き返す。

「はやてになら言っても良いでしょう…よろしいですか？陛下。」

「信用できる人なら。」

「では…そこにいらっしゃるのは、聖王女オリヴィエ陛下の隠し子…シルバ・ゼーゲブレヒト様です。」

「……………なんやってー！？」

機動六課にはやての絶叫が響きわたった。

出会い（後書き）

シ「シルバと」

キ「キャラの」

二人「「言わせて見ようあの名言」」

シ「このコーナーは作者が他の方々の前書きや、後書きに感化せられ突然やり始めた訳のわからない馬鹿で自己満足な駄文です。」

キ「シルバ君毒舌すぎだよ…他の作品の名言をリリなのキャラに読んでもらうコーナーです。」

記念すべき第一回は原作主人公のなのはさんです。」

な「よろしくね、二人とも。」

シ「てか、俺まだ本文で会ってないんだけど…」

キ「気にしちゃダメだよ、シルバ君。」

シ「今回の場面は…こちら」

無印編 サッカーの試合後のジュエルシード暴走時に

キ「では、なのはさんお願いします

な「ひとつ、私はジュエルシードの危険性を理解出来ていなかった。

ふたつ、回収する決断が一瞬鈍った。

みつつ、そのせいで町を泣かせた。

私は自分の罪を数えたよ。さあ、お前の罪を数えろ！」

キ「これは彼の有名な風都の初代仮面騎士であるハードボイルドのセリフですね。」

シ「…これ、なのはさんのキャラじゃ無くない？」

な「私もそれに同感したいな。」

全員「「それではまた次回を会いしましょう。」」」

聖王教会にて（前書き）

レリックについてオリ設定があります。

話し合わなくなったらどうするんだろ…

誤字脱字気になる点があったら教えてください

聖王教会にて

side はやて

私は今、聖王教会の一室にてカリムと聖王陛下？に彼がここに居る理由を説明をして貰っていた。

「聖王陛下？がこの時代に来たにそんな理由が有るとな？」

「その『聖王陛下？』ってのいいかげんやめてくれない？シルバで良いよ。」

「ほな、シルバ君って呼ばせて貰うな？」

聖王陛下？に了解を貰う…って冗談やから睨まんという！

それより何で心ん中読まれたんやろ？

「顔に出てたぞ。」

なんやってー！

side out

「はやてに説明し終わりましたし…」

そろそろ陛下に現在はやてに請けて貰っている依頼を説明させてもらいたいのですが…」

「ちょい待ちいカリム！

その話してええんか？」

「ええ…元々『あれ』は聖王家の物だから、許可をいただかないといけないわ。」

それに聖王教会は聖王に仕えてこそでしょう？

はやては納得いかない？」

「確かにそうやけど…いや、カリムがそう言うならうちは何も言わん。」

「ありがとう、はやて。」

そう言つとカリムはシルバに向き直る。

「陛下、現在私達はロストロギアと呼ばれる物の内に含まれる聖王家のある遺産を回収しています。」

「ロストロギア？」

「はい。崩壊した世界や文明の持っていた力の塊を示す言葉です。」

「ふん…大体分かった。」

さつき聖王家のある遺産つて言っていたが、何を回収しているんだ？

「【レリック】です。」

「なるほど…たしかに確認なしで回収して良いもんじゃないな、それは。」

「私が現在はやての六課に回収するよう依頼したのには理由があります。」

そう言つとカリムは何かを撫でるように右手を振る。

すると幾つものウインドウが空中に現れる。

「数年前から、何者かがレリックを回収しているのです。」

「なに…？」

カリムの言葉にシルバは飲もうとしていた紅茶を直ぐに降ろす。

「さらにレリックが発見された場所などで高エネルギー研究施設の跡などがあり……」

ガシャン

二人が音のした方を見るとシルバが持っていたコップを握りつぶしていた。

「…何処の誰だか知らんが…いい度胸だ…」

決めた、俺をその六課とやらに入れる。」

「…はい？」

二人はシルバの言葉に思わず間抜けな声を出す。

「だから俺を六課に加える。」

レリックを利用しての奴は俺がを叩き潰す！」

「しつ、しかし危険すぎます！」

「…カリム、レリックの正体って知っているか？」

「いえ…そこまでは…」

「なら教えてやるよ。」

聖王ってのはな自らの「鎧」の出力を上げるためにとある力の結晶であるレリックを取り込むんだ。

レリックを取り込んだものが死ぬと、取り込まれた力と取り込んだ者の力…二つの力の結晶が生まれる、それがレリックだ。」

「そっ…それではレリックというのは…」

「歴代聖王の遺体だ。」

「なるほどな…うちはええよ。先祖の遺体を利用されたら…うちも同じ事言うと思うしな。」

「はやて…分かりました。」

では聖王協会から派遣する査察官と言うことにしましょう。

陛下、貴方が聖王であることはバラさないで下さい。」

「ああ、分かってる。ありがとう。」

「それとシルバ様にお返しするものがあります。付いてきて下さい。」

「

そう言つとカリムは立ち上がり歩き出した。

side シルバ

カリムに連れてこられ、第8資料保管庫と書かれた扉の前に着いた。

「少しお待ち下さい。」

カリムはそう言つと扉の横にある、変な機械にカードを通した。

ガチャン

鍵が外れ扉が開く。

中にはいると直径1メートルほどの巨大な水晶が置いてあった。

間違いない『あいつ』だ。少し興奮しながら水晶に手を当て名前を呼ぶ。

「おいで！レグルス！」

《GAOOOOOO!!》

side out

シルバが名前を呼んだ瞬間、激しい光と巨大な雄叫びが上がる。

「眩し、何なんや！」

少しし光が止むとそこには綺麗な鬣を生やした巨大な白い獅子がいた。

《GAOOOOOO!!》

獅子はシルバの前に行き頭を下げてから再び遠吠えを上げる。

まるで王を帰還を祝福するかのように…

聖王教会にて（後書き）

キ「前回に引き続き今回もなのはさんです。」

シ「え？まだやってたのこれ？」

キ「まだものも今回で第二回だよ！？」

な「こんなの書いてないで早く本編進めればいいのに……」

キ「はは……今回の場面はこちら」

無印編 ジュエルシードをかけた最終決戦でフェイトに向けてSL
Bを放つ時

な「さよなら……フェイトちゃん。多分初恋だった……」

キ「……これは、某『王の力』を持つ99代皇帝陛下のセリフですね

……」

二人「……」

シ「やっぱり二人って、そんな関係だったんですね……」

キ「しかもまだ九歳ですよ、この時。」

な「違う！そうじゃ無いの！そういうセリフなの！」

シ「大丈夫ですって。誰にも言わないですから……多分」

な「多分！？それに早速はやてちゃんに連絡しようとしてるの！？」

二人「……それではまた次回を会いましょう」

な「話を聞いて……！（涙目）」

六課への配属（前書き）

レグルスはまだ謎のあるデバイスです。

しかし原作の入らない…どうすんだ？

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

六課への配属

「で、このライオンさんは何なんや？」

第8資料保管庫から、先ほどの応接間に戻り、再び席に着くとはやてがシルバに尋ねた。

「こいつはレグルスって言うんだが…詳しいことは知らん！」

ガタン

シルバの発言にはやては椅子から落ちた。

「なんでやねん！おかしいやろ！あんたのライオンさんとちゃうんかい！？」

「ああ、八歳の時に母上達に貰った。」

「なら何で知らんのや！」

「ストップ！私を知っていることを説明するから。」

ヒートアップして来たはやてを、カリムが治めながら言う。

「レグルスは歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイスなの。」

彼は歴代聖王の知識や記憶を保管する一種の図書館の様なものであると同時に、ユニゾン時に身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にするものなの。

あとは、反乱に対する絶対的な抑止力とも言えられているわ。」

「反乱に対する抑止力？どういう意味や？」

はやては自分の疑問を口にする。

「そこまでは分からないわ。」

「そうかあ…」

はやてが呟く

「それと継承だけど、先代が譲り渡さないといけないうえに、継承された時点で赤ちゃんに戻るらしいのよ。」

「そう言えば別れた時はまだ子猫だったな…」

シルバが思い出したように呟く。

「……」

この天然な発言には流石のカリムも啞然とする。

「とにかく、このライオンさん…レグルスはシルバ君のデバイスと言っことでええんやな？」

はやてが無理矢理にも話を進めようとするが…

「なあ、子猫サイズになること出来るか？」

《GAU》

「おおゝ子猫になった！スゴいぞ！」

《GAUGAU》

シルバとレグルスは完全に無視である。

「待ちなさい！はやて！」

「止めんといてカリム！一発殴らんと気がすまん！」

それを見て殴りかかろうとしたはやてをカリムが羽交い締めにする。その奥でシルバがレグルス（子猫）と戯れていた。

暫くして場が収まり、話が元に戻る。

「では、聖王教会 教会騎士団騎士シルバ・メルゼーを機動六課に正式に派遣したいと思います。」

カリムがシルバとはやてを見ながら宣言する

「謹んでお受けします。」

シルバはそれを了承し…

「機動六課、了解いたしました。」

はやても書類を受理した。

side シルバ

聖王教会での話し合いの後、俺は直ぐに機動六課に連れて来られた。

「と言うわけで、この子が聖王教会から派遣されたシルバ君や！」
現在は、六課のみなさんと顔合わせ中だ。

「えゝ、聖王教会の騎士シルバ・ゼツゝメルゼー、頭の上に乗っているのはレグルスだ！よろしく！」

危なゝ、今ゼーゲブレヒトって言いそうになったぞ。

「ゼメルゼー？」

「違う！メルゼーだ！」

「よろしくゝ」

六課のみんなが返事してくれた。

クイツクイツ

「うん？」

食べ物を摘んでいると、服を引つ張られたのでそちらを見る。

そこには今朝の女の子ゝキャロちゃんが居た。

「シルバ君も六課に入る事になったんだね。

でも、何で時空管理局の事を知らなかったの？」

これはマズいゝなんか良い言い訳をゝ

「シルバ君の保護者の人ゝカリムって言うんやけどな、その人が危ない目に遭って欲しくないからって内緒にしてたらしいんや。」

はやて、ナイス！

「そうだったんですかゝゝ」

「まあ、年も近いんやから、仲良うしたってや。」

「はい！分かりました！」

おおゝなんか上手く丸め込んだ。今、初めてはやてに感謝したぞ。

「何か失礼なこと考えてへんか？」

「ゝゝ」

以外と鋭いな。

「おい！メルゼーと言ったな。」

突然、後ろから声をかけられた。

side out

s i d e シグナム

あのシルバ・メルゼーという者…かなりの手練れだな…

それにしても、レグルス…どこかで聞いた名だが…まあ今は置いておきましょう。取り敢えず今は戦ってみたい！

「おい！メルゼーと言ったな。」

メルゼーがこちらを向き返事をする。

「そうだけど？」

よし！

「私と勝負しろ！」

六課への配属（後書き）

キャラ「あれ？名前の表示が変わってる…」

シルバ「作者がようやく頭文字だけじゃシルバ、シグナム、シャマルがかぶる事に気づいたんだよ。」

キャラ「その作者は？」

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

キャラ「これどうしたの？」

シルバ「前回終わった後になのはさんとOHANASHIらしい。」

キャラ「なるほど…じゃあ、もう名言コーナーは無かな？」

まだあきらめた訳じゃ無い！！

シルバ「突然復活したな…」

という訳でこれ読んで。

二人「がんばれ作者！！みんな応援してるぞ！！」

よし！がんばる！

シルバ「茶番だあああ！作者あああ！」

キャラ「あつ、名言だ。」

今回の名言「茶番だあああ！」

剣の騎士との模擬戦（前書き）

先日本屋でハイレベル力学りきがくをハイベル力学ベルかがくと読んでかなりびっくりしました。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

剣の騎士との模擬戦

「はい？」

シルバが思わずアホな声を上げる。

「だから模擬戦をしないか、と言っているのだ？」

「それは分かる。」

俺が聞きたいのは、何故会って早々に戦わなければならなのか、と言うことだ。」

「理由は簡単だ。同じ『騎士』が仲間になったのだ、挨拶代わりに…と言った感じだ。」

シグナムの発言にその場にいる全員の心の声が一つになった。

（（どんな挨拶だ！！））

「なるほどよく分からんが、そう言う挨拶もあるのか…」

（（そんなもんあるか！！））

シルバの勘違いした呟きにまたしても心の中で全員が突っ込んだ。

「良いだろう。何処でやるんだ？」

「訓練所だ。着いてこい。」

そう言って二人は去っていった。

「…シルバ君がどんな感じで戦うのか気になるし、私達も行くのか。」

「なのはの提案によって全員で模擬戦を見ることになった。」

side シルバ

カリムに、なるべくバレるなって言われたが…魔力光はレグルスの使うとして、霸王流は…そのとき次第だな。

「もうすぐ着くぞ。」

相手の騎士に言われ考え事を中止する。

さて、この時代で初めての戦いだ。気を引き締めていこう。

訓練所に出来上がった、廃墟の中で相手と対峙する。

「レヴァンティン、セツトアップ！」

set up

一瞬、光が相手を包み中から剣を持ち、騎士甲冑に身を包んだ相手が出てきた。

「さて、取り敢えず名を名乗ろう。」

私は「剣の騎士」シグナム。

そして『炎の魔剣』レヴァンティン。」

俺の二つ名って…聖王だよな。それはマズいから即興で…よし。

「じゃあ、此方も改めて名乗ろう。」

黒い月の騎士 シルバ。

こいつは『小さき王』レグルス。

武装形態！

名乗り終えると同時に武装形態を取る。

「ほお、特殊な強化魔法か……面白い！」

「いくぞレグルス、ユニゾン……イン！」

《GAOOOO!》

「なに！？そいつはユニゾンデバイスだったのか！？」

相手……シグナムは驚愕の声を上げる。

「準備は出来たぞ。」

Side out

「あの子猫、使い魔…守護獣じゃ無かったの!？」

「あれはアニマル型ユニゾンデバイスっちゅうやつらしいで。」
はやてが説明する。

「でも動物型のユニゾンデバイスなんて聞いたこと無いよ？」
なのはが質問する。

「まあ、うちも聞いたこと無かったしな。そやから、レグルスが始めてや。」

「動物型のデバイス…解析してみたい！」
メカニクのシャーリーが興奮気味に言う。

「止めといた方がいいで…無闇に触ろうとすると噛まれるで。」
はやては若干疲れた顔をしながら言う。

「大丈夫ですよ！だって子猫じゃないですが。」

「…あれは魔力の消費を押さえるためなんや。」

実際は大きくて白いライオンやで…」

「またまたそんな冗談を

模擬戦終わったら頼んでみよっと。」

はやての言葉を冗談と受け取ったシャーリーはどうやって解析させて貰おうかを考え始めた。

シルバの準備が終わると二人は同時に前に出た。

接近と同時にシグナムが剣を振り、シルバはそれを左手の甲で上に受け流すと同時に腹に向け右拳を放つ。

「あまい！」

しかしそれを予想していたシグナムに簡単に避けられてしまう。
そのまま受け流された剣を上から振り下ろす。

今度は受け流さず、右足を軸にからだを回転させ、わき腹に向け左蹴りを放つ。

「吹き飛ばし！」

「グッ」

蹴りをわき腹にモロに受け、シグナムが吹き飛ぶ。

「やはり強いな…今のは効いたぞ。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「ならもうちょっと苦しそうにして欲しいな。」

そう文句を言うシルバにも笑みが浮かんでいる。

「久々の決闘で調子が漸く出てきたのでな…」

「段々ユニゾンに慣れて来た事だし…」

「これからが本番だ!!」

再びお互いに接近し高速で打ち合う。

拳を剣の腹で。打ち下ろしを腕で。蹴りを鞘で。横風を掌で。

弾く。逸らす。防ぐ。受ける。

しばらく激しい攻防を繰り広げ、埒が明かないと悟り、同時にお互い一步下がる。

シルバは拳を、シグナムは剣を、突き出す。

「紫電一閃!」

シグナムはカートリッジを使い、魔力変換の炎を纏わせ威力を高めた剣撃を。

「貳式 紅蓮拳!」

シルバはレグルスの力を使い、魔力変換で炎を作り出力を上げた拳撃を。

「ウオオオオツ!!」

それぞれ渾身の力で打ち出す。

しばらく力は均衡したが、お互いの炎が混ざり合い大爆発を起こす。煙が立ちこめ何も見えない状態におちいる。

そして二つの影が確認出来たと同時に片方が走り出し…

「貳式 獅子紅爆炎拳!」

煙を吹き飛ばしながら、全魔力で作った獅子の頭の形をした炎を拳に纏わせ放つが…

《シュランゲフォーム!》

蛇腹形態になったレヴァンティンのカウンターを受けシルバは気絶させられてしまった。

剣の騎士との模擬戦（後書き）

なのは「ターゲットスコップ、オープン 電影クロスゲージ明度20 エネルギー充填120% 対 ショック、 対閃光防御

キャラ「作者が実写版を見ようと借りてきたからこのネタらしいんだけど…これじゃ、魔砲少女どころか波動砲少女だよ…」

シルバ「……」

キャラ「シルバ君は負けたショックで話さないし…」

シルバ「……」

キャラ「作者も疲れたらしいので今回はこれで、」

キャラ「それではまた次回を会いしましょう！」

シルバ「……」

キャラ「って挨拶ぐらいしてよー！」

みんなで生きる時代（前書き）

今回はいつもに増して分かりにくいです。すみません。
模擬戦後の話と質問タイムです。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

みんなで生きる時代

side シルバ

ゆつくりと意識が浮上していく。

疲れ切り重い目蓋を開けると天井が見えた。

「おっ、目覚めたんか？」

「はやて、か…」

「まさか、シグナムとあそこまでやり合うと思わんかったわ。」

「けど、負けた…」

「それでもその年であれなら強いやろ。」

この時代ならそうかも知れないが…

「俺の時代では生き残れない…」

無意識のうちに手を堅く握っていた。

「…ちがうで、シルバ君。」

はやての言葉で頭に血が上る。

「何故そう言いきれぬ！俺の時代を知らない…貴様に何が分かる！」

「そうやな。うちはシルバ君が生まれた時代を知らん。」

けどな、今はここで生きているなら、ここがシルバ君の時代やで。」

「な…に？」

「シルバ君は確かに古代ベルカから来たかも知れん。そやけど今はこの時代で生きている。そやからここがシルバ君の時代や。」

「ここが俺の…時代…」

「そうや、一人で生きられへんのやら仲間に支えて貰う。それがこの時代や。」

うちも昔は一人で苦しみながら生きていた。あのままやったら…死んでしもつたかも知れん。

けどな、家族や友達が出来て、みんなに…仲間に支えて貰って生きてるんや。」

仲間に支えて貰う…か。

はやては強いな…

「もう大丈夫そうやな。」

「ああ、落ち着いた。」

「そっか…ほな行くで。」

「そうだな行くか…ん？」

「行く？何処にだ？」

「何だかやな予感がする。」

「みんなの質問タイムや！」

はやての事、少し認めてやろうと思ったけど止めた。

はやてに連れられて入った部屋は、ちょっとした休憩室の様な所だった。

「ほな、みんなの気になつとる事どんどん聞いてや。」

はやてがまるで自分が答える…みたいに言った。

「はい！私から質問して良いですか？」

「ええよ」

はやてが勝手に許可する。

「何故、貴様が決めてんだ…で何？えつと…」

青い短髪の少女に向き直る…ん？何か引つかかるなこの子。

「スバル・ナカジマです！」

「スバル…ね。俺のことはシルバで良いよ。あと丁寧語は止めて。

俺の方が年下だし。」

「じゃあ、シルバって呼ぶね。」

さつき使ってたのって、ストライク・アーツじゃ無いよね？あれ何て言うの？」

「あれはベルカ古流武術だ。」

「それって、私も使える？」

「多分無理だな。小さい頃から特殊な練習で体鍛えないといけない

し。」

「そっか」

スバルは残念そうに言う。

「私はティアナ・ランスター。ティアナで行いわよ。」

今度はオレンジの髪を二つに結わえた女の子が自己紹介をしてくれた。

「さっきの模擬戦で遠距離魔法を使わなかったけど、どうして？」

ああ、それか。

「俺、遠距離系の苦手なんだよね。」

「そうなんだ…」

えつと次は…赤い髪の子か…

「僕はエリオ・モンディアルです。」

「じゃあ、エリオね。」

「はい。あの突然大きくなったのは魔法じゃ無いんですか？」

「あれは特殊な身体強化魔法だよ。」

身体強化みたいに纏うタイプは得意なんだ。」

「それって難しいんですか？」

「そうでもないよ。他にはない？」

「私からも訊ねて良いか？」

突然、今まで黙っていたシグナムが話しかけてきた。

「良いよ。」

「模擬戦の前に名乗りあった時、『黒い月の騎士』と言ったな。」

「ああ。」

「黒い月とは何だ？」

これは…話して大丈夫なのか？

「いや、答えたくなければいいんだが…」

俺が黙ったのをシグナムは、否と取ったらしい。

「そう言う訳じゃないんだけど…簡単に言えば『暴走する力』かな。」

「暴走…」

「うん？キャロちゃん何か言った？」

「って、聞いてないし…何か考え始めちゃったよ…まっいいか。どうやら今ので質問は終わりらしい。」

「ほな自己紹介してない人達に自己紹介して貰おか。」

「はやてが言う」

「そうだったね。私達、まだして無かったね。」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウンだよ。よろしくね。」

「私は高町なのはだよ。よろしく、シルバ。」

「金髪の人がフェイトさんで、栗毛色の人がなのはさんか。」

「フェイトさんなのはさんね…よろしく。」

「ちよい待ち！」

「はやてが突然割り込んでくる。」

「何だよ、いきなり。」

「何だよ、じゃないわ！何で二人は『さん』付けなのに私にはつかへんのや！」

「なんだそんな事が…」

「はやては同じ教会騎士団の騎士だからいいじゃん。」

「何がいいのかさっぱり分からんわ！」

「で、シグナムの隣にいる人達は？」

「無視かいな！？」

「何か騒いでるが気にしない。」

「あたしはヴィータだ。よろしく。」

「私はシャルですよ。よろしくね。」

「よろしく。」

「二人はやっぱりシグナムと同じ…？」

「ああ、ベルカの騎士だ。」

「ふゝん。」

「まだ無視するんか！」

「はやてが叫んでくる。」

「え？ごめん何？」

「何かもうええわ。」

「…疲れたから今日は解散や。お疲れ…」

「そう言うとはやては去っていった。」

side out

おまけ

「あれどこ行っちゃったのかな？」

「…何してるんですか？シャーリーさん。」

「ティアナにスバル！良いところに！」

「今ね、シルバ君の子猫を探してるんだけど知らない？」

「レグルスなら休憩室の椅子で寝てましたよ。」

「ありがとう！ティアナ。」

「何だっただんどう？」

「さあ？それよりティアンおなか空いちゃったよ」

「はいはい。」

「やっと見つけた！」

《zzzz》

「寝てますね！チャンスです！」

《！！！！》

「よし、捕まえた！」

《GAOOOOOO！！》

「えっ…ぎゃー！？」

次の日、無数の歯形があるメカニックが休憩室で見つかったとか…

みんなで生きる時代（後書き）

キャラ『今宵のノコギリはよく斬れる…うふふふ』

キャラ「……」

シルバ「…なんで不機嫌なの？」

キャラ「…私がヒロインなはずなのに出演が少ない。」

シルバ「それは仕方ないと思うよ…話進める上で必要なんだよ…多分。」

キャラ「今回なんか最初の方、八神部隊長がヒロインぽいし。」

シルバ「そんな事無いと思うけど…」

キャラ「シルバ君、デレデレしてたし…」

シルバ「してない！してないから睨みながらノコギリ出さないで！」

キャラ『二人を、幸せにはさせませんから。永遠に。』

シルバ「ホントに怖いから！キャラ崩壊してるから！ちょっとスト
ップ！ギャアーーー！！」

ファーストアラート（前書き）

ようやく原作突入です！

しかし…なんの捻りもないorz

キャラとの本格的な絡みは次からです。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

ファーストアラート

side シルバ

あの模擬戦の後、毎日シグナムと模擬戦をしている。

なのはさんからは、シールドなどの基礎魔法を教えてもらった。そのとき判明したのだが、レグルスは魔法の補佐が出来なかった。なので現在、カリムに頼んでデバイスを作ってもらっている。

「おい、シルバ。今日もやるか？」

前から来たシグナムに訊ねられる。

「ああ、頼む。」

「あつ、おったおった。」

「うん？はやてかどうした？」

「カリムからの呼び出しや。シルバ君も連れて来いってさ。」

「了解。シグナム…」

「ああ、わかった。」

「悪いな。」

「かまわん。」

そのままシグナムと別れて、はやてについて行く。

「呼びだして事は、デバイスが完成したのか？」

「それだけやないと思うで…渡すだけならうちがもらってくればいいんやし。」

「つて事は…レリックか…」

「そうとも限らへんけどな。」

「行けば分かるか…」

所でどうやっていくんだ？」

「フェイトちゃんは6番ポートに用があるらしいから、ついでに送ってもらふんよ。」

「ふん。」

「フェイトちゃん！遅れてもうたか？」

「大丈夫だよ。シルバも連れて行くの?」

「すまへんな、増えてもうて。」

「いいよ。じゃあ乗って。」

「あいよ。」

side out

「フェイトさん!」

「八神部隊長!」

「あとシルバも。」

「うん。」

「俺はおまけ扱いかよ…」

ちようど早朝訓練が終わり、隊舎に戻るところだったらしい。

「すごい!これフェイト隊長の車だったんですか?」

ティアナが車を眺めながら言う。

「そうだよ。地上での移動手段なんだ。」

「みんな練習の方はどんなや?」

「あ〜」

「がんばってます。」

4人が苦笑いしながら答える。

「エリオ、キャロごめんね。私は二人の隊長なのに全然見てあげられなくて。」

「あついえ、そんな…」 「大丈夫です。」

そんなやりとりを見て、

「そう言えば俺のコールサインって何なんだ…?」

シルバがおもむろに質問する。

「今更やな…セイクリッド01やで。」

「四人ともいい感じで育ってるよ。」

「そうか!シルバ君も強くなってるらしいし頼もしいな!」

「3人は今からお出かけですか？」

「私とシルバ君は協会本部でカリムと会談や。」

「私は8番ポートまで。」

お昼には戻る予定だから一緒に食べようね、エリオ、キャラ」

「はい！」

会話を終わるとフェイトは窓を閉じて車を発進させた。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官カリム・グラシアさんか…私はお会いしたこと無いんだけど…」

「そうやったね。」

「はやては何時からの付き合いなんだ？」

後ろの席からシルバが声をかける。

「えっと…教会騎士団の仕事で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかの頃のはずやから…って何でシートベルトしてへんの！？」

返事をしながら後ろを振り返りシルバを見て叫ぶ。

「ふえ！？」

突然の声に驚きフェイトは思わずブレーキを踏んでしまった。

「グエー！！」

当然シートベルトをしていないシルバは前の席に顔面から突っ込みカエルを潰したような声を出す。

「ごめん！大丈夫？」

「気にする事ないよフェイトちゃん。」

シートベルトして無いシルバが悪いんや。」

はやては呆れながら言う。

「痛い…シートベルトって何だ？」

「最初乗った時に説明したやる！もう忘れたんか！？」

「いや…聞いてなかったただけだ。」

「…フェイトちゃん。」

このバカ放り出してええか？」

「ええ！？駄目だよ！」

そんな会話が聖王教会の前に着くまで続いたとか。

「騎士カリム、騎士はやたと騎士シルバがいらっしやいました。」

書類仕事をしているカリムに赤みがかった短髪の女性：シャツハ・ヌエラがモニターで声をかける。

「早かったのね。」

私の部屋に来てもらってちょうだい。」

「はい。」

「それからお茶を三つ、ファーストリーの良いところのをミルクと砂糖付きでね。」

「かしこまりました。」

「よしと。」

そう言いながらカリムは書類を脇に寄せる。

コンコン

「どうぞ。」

「カリム、一週間ぶりやね。」

「おじゃまします。」

「二人ともいらっしやい。」

「はやて、部隊の方は順調？」

「どっかの王様が報告書を出してくれへんこと以外は順調や。」

「あちつ。この紅茶おいしいな…」

「…」

「部隊はカリムのおかげで順調や。」

「そう言うことにしておくといろいろお願いもしやすいかな。」

「何や、今日会って話すんはお願い方面か？」

「…」

カリムは真剣な顔になり部屋のカーテンを閉める。

そして幾つかモニターを出す。

それを見てはやては真面目な顔になり、シルバは紅茶を飲むのを止めた。

「このガジェット…新型？」

「いままでの1型以外に新しいのが2種類。戦闘性能はまだ不明だけど…、これ3型はわりと大型ね。」

本局にはまだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたんだけど…」

「それより俺は真ん中下のが気になるんだか…」

「それが今日の問題です。一昨日付でミットチルダに運び込まれた不審貨物。」

「レリックやね？」

「その可能性が高いから陛下を連れてきてもらったの。」

「なるほどな…これは間違いなくレリックだ。」

「やはりですか…2型と3型が発見されたのも昨日からですし…」

「ガジェット達がレリックを発見するまでの予想時間は？」

「早ければ今日明日。」

「そやけどおかしいな…レリックが出てるのがちよと早いような…」

「おい、出てくるのが早いってどういう事だ？」

「今までは一つ出てくると次のが見つかるまでいつも結構の時間がかかるやけど…それが今回はちょっと早いんよ。」

「だから会って話したかったの。」

これをどう判断すべきか、どう動くべきか…」

「なるほどな…」

「レリック事件も、その後に起きるはずの事件も、対処を失敗する訳にはいかないもの。」

「……」

カリムの言葉を聞き、シルバとはやてはお互いを見て無言で頷き合う。

はやてはカーテンを開け、シルバはカリムに紅茶のカップを差し出す。

「陛下？ はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。」

カリムが力を貸してくれたお陰で部隊はもういつでも動かせる。

即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。

それに：なんとと言ってもレリックの本来の持ち主である聖王陛下まで居るんやから。」

「そう言うこと。 だからそんな辛気臭い顔すんなよ。」

A L E X

「……！？」

ファーストアラート（後書き）

シルバ「安心して言うのは車の後部座席で眠ることさ。」

シルバ「ようやく原作だよ…しかし、まんまだなこれ。」

キャロ「…まんまじゃないよ…私の出番が原作より少ない…」

シルバ「作者の文才が無い所為だ。」

キャロ「しかも、また八神部隊長がヒロインみたいだし…」

シルバ「だっ大丈夫だよ。ほら前書きで次からは…って書いてあるし。」

だからノコギリしまっ！お願い！それ前回のネタだから！」

初出勤（前書き）

かなり頑張りました。今回からキャロがシルバを意識し始めます。
後書きで少し補足があります。

誤字脱字があつたら教えてください。
あと感想をもらえるとうれしいです。

初出勤

A L E T

「このアラートって…」

「一級警戒態勢!？」

なのは達が新デバイスの説明をしていると、突然アラートが鳴り始めた。

「グリフィス君!」

なのはが画面に呼びかける。

「教会本部から出勤要請です!」

「なのは隊長フェイト隊長グリフィス君、こちらはやて!」

「うん。」

「状況は?」

フェイトが状況を訊ねる。

「教会騎士団の調査部が追っていたレリックらしき物が見つかったんよ。」

場所はエーリムの山岳地区

対象は、山岳リニアレールで移動中。」

「移動中って…」

「まさか…」

「そのまさかや。」

内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。

リニアレール内のガジェットは、最低でも三十体。大型や飛行型、未確認タイプも出てるかもしれん。

いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃんいけるか?」

はやてが二人に聞く。

「私はいつでも。」

「私も!」

隊長二人が返事をし…

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもOKか？」

「……はい……」

四人も声を揃え返事をする。

「よし、ええお返事や！」

シフトはAの3

グリフィス君は隊舎での指揮！リインは現場管制！」

「はい！」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場での指揮！」

「了解！」

はやては全員に指示を出した後、締めくくろうとする。

「ほんなら……」

「キャロちゃん！レグルスよろしく！」

シルバが突然はやての発言を遮る。

「なんで人の話をさえぎるんや！？」

まあ、ええわ機動六課FW部隊出動！」

「……はい！……」

side シルバ

「はやて！俺はみんなと合流するぞ！」

はやてに声をかける。

「そんなこと言うても……どうやって行くんや？」

うつ、確かに……どうしよ……

「陛下、これを。」

そう言つてカリムが鍵と指輪を渡してくる。

「これは？」

「陛下専用のデバイスとバイクの鍵です。」

「何！？よし、ありがたく使わせてもらっぞ！」

「ちょい待ちい！」

ドアから出て行こうとするとはやてに止められた。

「自分、バイク運転できるんか!？」

「ああ、ヴァイスにこの前習った。」

「免許は!？」

「なんだそれ? 旨いのか?」

「旨いわけあるか!！」

何だよ…突然怒んなよ。

「怒るに決まっとるやる!！」

「こころを読むな!！」

「まあまあ落ち着いて、はやて。陛下、免許というのは先日渡されたカードですよ。」

「ああ、あのカードか…」

「何時の間に取ってたんや!？」

「2日前、ヴァイスと出掛けた時。」

「2人で出掛けたと思ったらそんな事しottaんか…」
はやてが頭を抱える。

「まあええ、頼むでシルバ！」

「了解。あつ、そうだ。みんなの乗ってるへりと通信したいんだか…」

「はいな。今送る。」

「よし。じゃあ、セイクリッド01、シルバ・メルゼー! 行くぜ！」

side out

side キャロ

気付くと私は暗闇一人で立っていた。

チリン

不意に鈴の音が聞こえ、俯いていた顔を上げる。

目の前にテントのような建物があり、中には村の長老とおばあちゃん、そして小さい私と私の腕に抱かれているフリードがいる。

「アルザスの竜召喚部族、ルシエの末裔キャロよ。」

長老が小さい私に話しかける。

「僅か六歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた。お前は真、素晴らしき竜召喚師よ……」

その言葉と裏腹に長老の顔は厳しい。

「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ。」

「え？」

「キョクル」

「すまん……お前をこれ以上、この里へ置くわけにはいかんのじゃ

……」

おばあちゃんが悲しい顔をする。

また私は闇の中で一人になる。

「竜召喚は危険な力……」

自分の両手を見つめる

「人を傷つける、怖い力……」

不意に左手が赤く染まって見える。

ペロ

「ひゃう!？」

レグルスに頬を舐められ、夢から現実へと戻り、移動中だということを思い出した。

side out

機動六課オペレーションルームでグリフィス・シャリー・ルキノ・アルトの四人が巨大モニターに映る車両を監視しながら、情報を整理している。

「問題の貨物車両、速度70を維持、依然進行中です。」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

アルトとルキノがモニターを見ながら現状を報告する。

「時間の問題か……」

報告を聞きグリフィスが呟くと同時にオペレーションルームにサイレンが鳴り響く。

「アルト！ルキノ！広域スキャン！サーチャー空へ！」

シャーリーは二人に指示を飛ばしながらパネルを操作しモニターに拡大映像を映し出した。

「ガジェット反応！空から！？」

「航空型！現地観測隊を捕捉！」

アルトとルキノが驚きの声を上げる。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車止めて現場に向かうから飛行許可をお願いします！」

「了解！市街地個人飛行、承認します。」

山の間をぬって飛ぶヘリの中。

「ヴァイス君！私も出るよ、フェイト隊長と二人で空を抑える。」

なのはが操縦席に顔を出し、ヴァイスに頼む。

「うつす！なのはさん、お願いします！」

ヴァイスはハッチを開ける。

「じゃ、ちよつと出てくるけど、みんなも頑張ってズバツとやっつけちゃおう！」

「……はい！」

「はい！」

キャロの返事が少し遅れる。

「キャロ。」

なのはに声をかけられ、キャロの肩がふるえる。

「大丈夫、そんなに緊張しなくても。」

キャロに近づき両手で顔を包む。

「離れてても通信で繋がってる、独りじゃないから。ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法はみんなを守ってあげられる、優しくて強い力なんだから…ね？」

キャロに向かって、笑みを浮かべる。

「こちらシルバ！」

なのはの話が終わると同時にモニターが現れる。

「今、俺もそっちに向かつてるから！」

「なんでバイクに乗ってるの!？」

「2日前に一緒に出掛けた時に免許取ったんスよ。」

なのはの驚きにヴァイスが答える。

「そんな事してたんだ…」

ティアナが呟く。

「とりあえず」

なのはがハッチに向かう。

「スターズ01、高町なのは!行きます!」

なのははハッチから飛び降りる。

《Standby ready》

「レイジングハート、セーリットアップ!」

落下する中、左手を横に振るとレイジングハートが光り輝く。

レイジングハートは起動状態に変わる。

なのはの髪型はサイドポニーテールからツインテールになり、白いバリアジャケットを身に纏うと足に翼を作り飛んでいく。

「…お前等も空中でセーリットアップするのか?」

シルバが4人に訊ねる。

「えっ?そのつもりだけど…」

「当たり前でしょ。」

「そのつもりです。」

スバル、ティアナ、エリオの順番で答える。

「…キヤロちゃん？」

唯一返事の無かったキヤロに話しかける。

「えっ？あつ、はい。」

暗い顔をして俯いていた為か話を聞いていなかったようだ。

「キヤロちゃん、怖い？」

「えっ？」

「その顔は緊張だけじゃない…戦うのが怖い？」

「…」

キヤロはうなづく。

「じゃあ、そうだな…キヤロちゃん『がんばるな』。」

「えっ？」

キヤロは何を言われたか理解できないと言った顔をする。

「俺が戦い方を教わった人…父上に一番最初に教えられたことは、

『恐れる』だ。」

「どういう意味…？」

キヤロが訊ねる。

「怖がるのは恥ずかしい事じゃない。その恐怖を乗り越えてこそ強

くなるんだよ。もしも1人じゃ怖すぎるなら…」

「怖すぎるなら？」

「俺と一緒に戦ってやる！だから安心しろ！恐怖を乗り越えて前に

進めキヤロ・ル・ルシエ！」

「…うん！ありがとう！／＼／」

キヤロは顔を真っ赤にしながら笑顔で返事をした。

「あの…そろそろ作戦の話をしていいですか？」

2人の会話が終わったのを見てラインが話しかける。

「いいよ。」

「はっ、はい／＼／」

普通に返事をしたシルバに対し、キヤロは恥ずかしそうに返事をする。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、レリ

ツクを安全に確保すること。

ですから、スターズ分隊とライトニング分隊には別れてガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです。それとシルバは着き次第ライトニングに合流です。

レリックはここ、7両目の重要貨物室。スターズがライトニング、先に到達したほうがレリックを確保するですよ！」

「……了解！」「……」

「で……」

5人の返事を聞き、リインはその場で一回転する。

「私も現場において、管制を担当するです！」

騎士甲冑を身に纏いニツコリ笑う。

「じゃあ俺は急ぐために運転に集中するから。」

そう言うとしルバは通信を切る。

「さうして新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ！準備はいいか？」

ハッチを開け、ヴァイスがワードメンバーに声をかける。

まずはスバルとティアナがハッチに向かう。

「スターズ03、スバル・ナカジマ！」

「スターズ04、ティアナランスター！」

「「行きます！」」

2人はお互いの顔を見合わせ、一気に飛び降りた。

「行くよ、マツハキャリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップ！」」

《《standby ready》》

落下中の2人の声に応え、マツハキャリバーとクロスミラージュは起動状態に変化する。

2人は入隊前に着ていたジャケットをベースに、スターズの隊長であるなのはのものを動きやすいように改良されたバリアジャケットを纏う。

マツハキヤリバーはローラーシューズに変わりさらにリボルバーナックルを瞬間装着し、クロスミラージユは拳銃に変わる。

「次、ライトニング！チビ共、氣い付けてな。」

「はい！」

ヴァイスは、エリオとキャロに声をかけた。

「大丈夫？」

「うん！シルバ君のお陰で元氣出たから。」

「よかった。」

「心配してくれてありがとう。」

2人は顔を見合わせてから…

「ライトニング03、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！それとレグルス！」

「キユクル」

《GAOOO!!》

「行きます！」

かけ声と共に、一気に飛び降りる2人。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「「セットアップ！」」2人の声に反応しデバイスが一瞬光り起動状態に変化する。

エリオは赤い服に白いコートを纏ったものに、キャロはピンクの服に白いマントを纏い、白くて丸い帽子のバリアジャケット。

ストラーダは鎗に、ケリユケイオンはグローブに変わる。

車両の前方にスターズが、後方にはライトニングと本来の姿に戻ったレグルスが降り立つ。

「アレこのジャケットって…」

「もしかして…」

スバルとエリオの声にリインが答える。

「みんなのジャケットは各部隊の分隊長さん達のを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが高性能です。」

「……」

「……はっ、スバル感激は後！」

いち早く復活したティアナがスバルをたしなめる。

次の瞬間、屋根が突き破られる。

《バリアブル バレット》

スバルはマッハキャリバーで走り出し、ティアナはクロスミラージュで弾丸の生成する。

「シュートッ！」

魔力弾2発を屋根の上に上がってきたガジェットに当て撃墜する。

「うおおおっ！」

同時に、大きく開いた穴からスバルが車中へ飛び込み、真下に居たガジェットに拳を叩き込み撃破する。

「はあああっ！」

そのまま壁を垂直に走りガジェットに突っ込み破壊する。

床に着地するとスバルに向かって攻撃が放たれるが、しゃがんで避け、その姿勢のまま壁に向かって走り出す。

《アブゾーブ グリップ》

そのままのスピードで壁を駆け上がり、ナックルスピナーを回転させ、

「リボルバー……」

壁際に浮かんでいるガジェット目掛けて衝撃波を叩き込む。

「シュートッ！」

ドーンッ！！

「わあゝ！」

あまりの出力に勢い余って屋根ごと突き破ってしまい、急に足場を失いスバルは慌てるが……

《ウイング ロード》

「えっ？」

マツハキヤリバーがウイングロードを展開し、隣の車両へスバルを移動させる。

「マツハキヤリバー、おまえってもしかして、かなりすごい？」

スバルの言葉を聞きマツハキヤリバーが光る。

「加速とか、グリップコントロールとか…それにウイングロードまで…」

《私はあなたを、もっと強く、速くするために作られましたから》

「でも、マツハキヤリバーにはＡＩとか心があるんでしょう？だから言い換えよう。」

スバルはさつき出来た穴を見つめながら言う。

「おまえはね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ。」

《同じ意味に感じます。》

「違うんだよ、色々と」《考えておきます。》

「うん。」

「ティアナ、どうですか？」

リインがティアナに訊ねる。

「ダメです、ケーブルの破壊、効果なし！」

ティアナは、スバルとは別行動を取り車両を止めようとしていたのだった。

「了解、車両の停止はわたしが引き受けます。ティアナはスバルと合流してください！」

「了解。」

《ワンハンド モード》

ティアナは二挺に拳銃していたクロスミラージュを元の一挺に戻す。そしてスバルと合流するために走り出す。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、弾体形成もサポートし

てくれるんだね。」

《はい。不要でしたか？》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的には良くないんだけどね。でも実戦だと助かるよ。」

《ありがとうございます。》

キャロとエリオの2人は順調にガジェットを撃破し、8両目に入ったがそこには大型のガジェットが居た。

エリオとキャロの姿を確認したガジェットは、アームを2人に向かって伸ばす。2人はその場から大きく飛びのいて回避する。

キャロは着地と同時にフリードに指示を出す

「フリード、ブラストフレア！」

「キュクルー！」

「ファイア！」

ガジェットに向かって火炎弾を吐き出す。

ガジェットはアームでその火炎弾を弾きそのままキャロに向かって突き出す。

そのアームをキャロの隣にいたレグルスの体当たりで逸らす。

その隙にエリオが攻撃を打ち出す。

「てえええええい！」

大きく振りかぶったストラダを、渾身の力でガジェットに向けて振り下ろした。

「か、硬い……ッ！」

しかしストラダは、衝突の余波でスパークを撒き散らすも、ガジェットにダメージを与えられなかった。

「AMF……！」

ガジェットがAMFを発動さえ、ストラダに通っていた魔力が霧散してしまう。

「こんな遠くまで…!？」

かなり離れていたキャラコの魔法まで打ち消されてしまう。

「くっ…………!」

エリオは襲い掛かってきたアームをストラダで受け止める。
魔法による補助なしでは辛いのか少しずつ押され始める。

それを見たキャラコは急いで近寄ろうとするが…

「く…………大丈夫、任せて…………!」

エリオに止められる。

そのエリオに向けガジェットがレーザーを放つ。

それをとつさに上に跳び避けるが、直ぐに次の攻撃が来る。

次々と放たれるレーザーを転がることで避けるがアームによる攻撃を受け吹き飛んでしまう。

「うあああ!？」

さらにガジェットはエリオを捕らえようとアームを突き出す。

「やああ!」

キャラコはエリオを突き飛ばし助けるが、代わりに捕まってしまう。

「きやあ!」

そしてガジェットは屋根の上によじ登りキャラコを崖に放り出そうとするその瞬間、

ドゴオオン

上から来た何かによって車両内に叩き落とされる。

「よお鉄屑野郎!」

衝撃によつて発生した煙の中から現れたのは、騎士甲冑に身を包みキャラコを左腕に抱き抱えた大人シルバだった。

「シルバ君…」

「俺の仲間が世話になったな。お礼にたたき壊してやるよ。」
声にはかなりの怒りが込められている。

「レグルス。」

主に呼ばれたレグルスはすぐ隣に降り立つ。

「キャラコちゃんとエリオを頼む。」

《GAU!》

レグルスは一度吠えたとキャロを背中に乗せ壁に寄りかかっているエリオの元に行く。

「いくぜ!」

無事に離れたことを確認しシルバはガジェットに向かって走り出す。それに対しアームを突き出すが:

「断空拳。」

シルバの拳によって弾かれる。

そのままシルバは一気に距離を詰める。

「崩山拳!」

相手に振動を与え内部にダメージを与える技を受け、ガジェットは爆発を起こす。

「すごい!」

キャロとエリオは自分たちが2人がかりで倒せなかった相手を簡単に倒したシルバの強さを見て思わず呟く。

「3人とも聞こえるですか?」

「ああ。」

「はい。」

入ってきたラインの通信に返事をする。

「ライトニングは現場の引継をお願いするです。」

シルバはスターズと一緒に聖王教会までレリックの輸送をお願いするです。」

「また来た道を戻るのが:取り敢えずバイク取りに行かなきゃな:ッ!」

シルバはまた聖王教会にいくと聞いてめんどくさそうに言うが突然何かに気付いたように崖の先を見つめる。

「どうしたですか?」

シルバの行動にラインが訊ねる。

「:誰かに見られてるな:そこか!」

シルバはビー玉サイズの黒い球体を作り出す。

「暴王の流星！」

《メルゼズ・ランス》

そのまま球体は放たれると目にも留まらぬ速さで駆け抜ける。それはまるで…

「黒い流れ星…」

そう誰かが呟いた。

とある研究所で白衣を着た男が今回の機動六課の映像を見ていた。彼の左には通信用のモニターが開いており、そこには一人の女性が映っている。

「刻印ナンバー9、護送態勢に入りました。」

「ふむ…」

画面の女性の言葉に男が反応する。

「追撃しますか？」

「…やめておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけで充分さ…それに」

そういった男の視線の先には、スバルとキャロ、そしてなのはの映像があった。

さらに男は妖しげな笑みを浮かながらモニターの画面を変える。

「ふはははは、この案件はやはり素晴らしい！」今度はフェイトとエリオの映像に変わった。

「生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャン…」

だが男は最後まで言葉を紡げなかった。なぜなら…

「映像が消えた…いや消されたのか…」

そういうと、男は女性の方を向く。

「今、映像が消された瞬間を出せるかい？」

「はい。」

それを聞くと男は再びモニターをみて…

「フフフ……アハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑い出す。

「これは間違いなく『暴れ回る王の力』……なぜ、この時代に現れたのか！とても興味深い！！まるで私の為のような部隊だ！」

初出勤（後書き）

シルバ「人は誰でも、自分のいるべき世界を探している。そこは偽りの無い、陽の当たる場所！そこへ行く為に、人は旅を続ける。そして旅を恐れない！」

キャラ「今回のシルバ君かつこよかったよ／＼／」

シルバ「えっ？あつ、ありがとうキャラちゃん／＼／」

はいはい、後でにしてくださいね。

シルバ「ごほん！今回の話で出てきたバイクの免許に関する補足だったな。」

キャラ「この小説では管理局が聖王教会に所属していると、18歳未満でも取る事が出来る…って設定です。」

シルバ「免許の取り方も、講習を受けて試験運転をして平気だったらOKと言う事にしてるらしい。」

まあ要するに取り方は原付みたいなかんじだな。

キャラ「ちなみにミッドチルダの成人年齢は16歳という設定です。」

閑話 シルバの一日（前書き）

かなり短いです。

誤字脱字があつたら教えてください。
あと感想をもらえるとうれしいです。

閑話 シルバの一日

《GARUGARU》

レグルスがシルバの顔を舐める。

「ふあゝもう朝か…おはようレグルス。」

眠い目を擦りながらシルバが目を覚ます。

《GAO》

「さて、早く着替えてランニングに行くか。」

「ふつ、ふつ、ふつ。」

1時間ほど走り体を温めた後に、六課の裏にある森で霸王流の基礎訓練に入る。

「ふゝ、とりあえずメシ前はこんなところか…」

そう言うのと側の木に引っかけていた上着を取り、羽織り隊舎のシャワー室に向かい歩き出す。

シャワーを浴びた後、食堂の入り口でフォアードの四人に会った。

「おつ、みんなも今からメシか？」

「うん！シルバも？」

「ああ、もう腹ぺこペコだ。」

「よかったら、シルバ君も一緒に食べない？」

「別に良いぞ。」

「じゃあ、私とスバルが席を取っておくから、チビ組が先に食べ物取ってきなさい。」

「「ありがとうございます。」」

ティアナの発言にキャロとエリオはお礼を言うが…

「おい！いい加減チビ呼ばわりを止める！」

シルバは呼び方に文句を言う。

「はいはい。いいから行つてきなさい。」

ティアナは苦笑いしながら3人を送り出す。

「いつも思っただけどさ…」

シルバがスバルとエリオを見る。

「何？」

見られた2人はスパゲティーを食べながら返事をする。

「とりあえず食べ物頼張りながら喋んな。」

お前等の胃袋つてどうなつてんの？明らか収まんないだろ、構造的に。」

「えゝこれでも押さえてるんだよゝ」

「僕は育ち盛りですから。」

「スバルはおかしいとして…」

「おかしくないよ！」

スバルは直ぐに抗議する。

「「おかしいから。」」

シルバとティアナに当然のように返される。

「エリオ君の言うとおり、育ち盛りだからじゃないんでしょうか。」

キャロが言う。

「まるで俺は育ち盛りじゃ無いみたいな言い方だな、それ。」

シルバが不機嫌そうに文句を言う。

「ええ！？そつそう言うつもりで言つたわけじゃ無くて…」

若干涙目になりながらキャロが答える。

「冗談だよ。それより時間良いのか？訓練始まる10分前だぞ。」

「「「え？」「」「」」

シルバに指摘され4人は時計をみる。
「……遅刻だー!」

訓練所の片隅で、シルバとシグナムが向かい合っていた。

「こっちは用意できたぞ。」

「よっしゃ!じゃあ始めますか!」

シルバの声を合図に2人がぶつかる。

「また勝てなかった……」

シルバは悔しそうに呟いた。

「ふつ。当たり前だ、私はヴォルケンリッターの長だからな。直ぐに抜かされたら『烈火の将』の名が廃る。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「だが、かなり強くなってるではないか。最後のは私もかなり危なかったしな。」

「そりゃあ毎日戦ってるしな。これで強くなって無かったら泣くわ。」

「ふつ。それもそうだな。もう昼だし今日はここまでだな。」

「ああ、付き合ってくれて、ありがとな。」

「かまわんさ。私も楽しませてもらっている。」

午後、シルバは今に残っている、聖王や霸王の文献を読むために、ラインと向き合ってミッド語の勉強をしていた。

「なるほど……この意味はこれか?」

「違います。その意味はこっちです。」

「じゃあ、これは？」
「それはですね…」

「もうこんな時間ですか…今日はここまでにするです。」
「はいよ。」

晩ご飯の後、食堂でシルバはキャロ、エリオと雑談をしていた。

「ふ〜ん。大変そうだな…」

「うん。でも確実に強くなってる気がする。」

「私も六課に来てから体力がかなり増えたよ。」

「まあ、なのはさんはスパルタだしな〜」

「ハハハ…」

2人は乾いた笑いを浮かべる。

バタバタバタバタ

「なんだ？」

突然誰かが走ってくる音が聞こえて来た。

「見つけたで！シルバ君！」

「ちっ、はやてか。じゃあな！2人とも！」

そう言うシルバは、はやてが居るのは別のドアに向かって走り出す。

「「え？え？」」

当然2人は理解が追いつかない。

「待ちや！今日の報告書出さんかい！」

そう言うとはやてはシルバを追う。

「断る！めんどくさい！」

「ちゃんと書かせなこっちがカリムに怒られるんな！」

「知るか！」

「腕が痛い……」

結局あの後、はやてが呼んだなのはのバインドで捕まり報告書を書かされる羽目になったのだった。

「明日も早いし、今日は魔法系の勉強はいいや。とっとと寝よ。おやすみレグルス。」

《GAU》

閑話 シルバの一日（後書き）

スバル「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな。」

キャロ「今回はシルバ君の一日でした。」

シルバ「時期的には、ファーストアラートの前だな。」

竜魂召喚（前書き）

なんか上手く事が出来ない…

今エリオとルーテシアをくつつけようと思うんですが、どのタイミングで六課に合流させるか悩んでるんです。

なので、後書きにアンケートを作るんで答えてくれすとうれしいです。

誤字脱字、気になる点があったら教えてください。

竜魂召喚

side シルバ

「魔法の制御？」

「うん。」

俺は今キャラちゃんに相談を受けている。

「私の魔法に一つ、どうしても使えないのがあるの。」

「ふゝん。でも何でそれを俺に？」

「前にシルバ君が『暴走する力』って言ってたから…」

「コントロールのこつを聞きたい、って所？」

「うん。…それとシルバ君と居ると成功しそうな気がして／＼」

「え？何？」

最後の方は声が小さくて聞こえなかった。

「ううん！何でもないよ！」

「ふゝん。まっいつか。」

じゃあ、行こうか。」

「えっ？」

「練習するんでしょ？」

「うん！」

side out

2人はシルバがいつも朝、霸王流の練習をしている場所に来了。

「それじゃあ、どんな魔法で今までどんな時に使ったのかを教えて。」

「

シルバは側にある石に腰をかけながら、キャラにも座るように示す。

「えっと、名前は『竜魂召喚』フリードを本来の姿に戻す魔法。今までは危ない時や、力を見せる時ぐらいしか使ったことしか…」

返事をしながらキャラも石の上に座る。

「分かった。じゃあ、まず力と対話してみたら？」

「力と対話？」

「ああ、ごめん。分かり難い言い回しだったかな。要するに意識を力に集中するって事。」

「分かった、やってみる。」

「気持ちを落ち着けて…自分の出来ると思えるまで集中力を高めて…」

「……………」

キャラが瞑想に入っただのを確認するとシルバも瞑想を始めた。

《Drive ignition》

「来たか…」

ケリユケイオンの声にシルバは瞑想を解く。

「フリード…今まで不自由な思いをさせてごめんね。」

キャラは瞑想を解いてフリードに話しかける。

「今ならちゃんと…制御できるから！行くよ！竜魂召喚！！」

ケリユケイオンが強く光り輝き、次の瞬間キャラの体が少し浮き上がる。そしてさらに、キャラを包むように光の球体が発生する。

「蒼穹を走る白き閃光！我が翼となり、天を駆けよ。」

ケリユケイオンが再び、強く光り輝く。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

キャラの詠唱が完了すると、光の球体を吹き飛ばして白い飛竜が姿を現す。

「…やった！！しっかり制御できてる！！」

フリードの背中に跨ったまま、キャラは喜びの声を上げる。

「シルバ君！ありがとう！！」

「俺は何もしてないよ。ただヒントをあげただけさ。」

シルバは肩を竦めながら言う。

「そのヒントが有ったから出来たんだよ！」

「…それより折角だし、ちょっと戦ってみようか。」

シルバは顔を背けながら、わざとらしく話題を変える。

「うん！！」

「で？その結果、森を燃やした…と。」

シルバとキャラは、はやてに呼び出され部隊長室にいた。

「ああ。」

「はい…」

シルバは悪びれなく、キャラはすまなそうに返事をする。

「キャラは反省しとる様やからええよ。問題は何でシルバが反省してないかや！」

「いや、悪いと思ってるよ。でも、どうせ直ぐ植えるんだろ？」

「うがー！！」

「はやてちゃん！？落ち着くですよ！！」

全く反省してないシルバに、はやてが頭を掻き毟ろうとするがリインに止められる。

「はあああ…ふう。よし！落ち着いたで。

とりあえずシルバは今月給料なし！それと報告書百枚、明日までに提出。

キャラは厳重注意と報告書二十枚、期限はシルバと同じや。」

しばらくし、ようやく落ち着いたはやては2人に罰を出す。

「ちよつと待て！何で俺はそんなに処分が重いんだよ！」

シルバが異議を唱えるが…

「前科が有るからや！今まで何回、問題起こしたんや？」
「うぐ……」

はやての言い分に負けてしまう。

その日の夜、シルバの部屋の電気は消えなかったとか……

竜魂召喚（後書き）

キャロ「竜の肺は焰を吹き、竜の鱗は焰を溶かし、竜の爪は焰を纏う。」

キャロ「今回はシルバ君が報告書の所為で居ないので、ゲストとしてフェイトさんが来ています。」

フェイ「なんか、ぞんざいな書き方されてる気がするけど…」

キャロ「では前書きで書いたようにアンケートです。」

フェイ「エリオのお相手に関する事だね。」

キャロ「ルーちゃんが六課に合流するタイミングの候補は…」

1、【ホテル・アグスタ】後

2、【その日、機動六課】後

3、【約束の空へ】後

4、まず、くっ付けない

キャロ「以上の四つです。」

フェイ「くっ付けない場合は、他のヒロインを考えるつもりらしいです。」

キャロ「それでは…」

二人「また合いましょう!」「」

個別スキル（前書き）

少し遅くなりました。 すいません

取り合えずルーテシアの合流？保護？は【ホテル・アグスタ】の後になりました。

その為オリジナルが増えるので、かなりペースが落ちると思います。

個別スキル

side リンフォース？

5月13日。

部隊の正式稼働後、初の緊急出勤がありました。

密輸ルートで運び込まれたロストロギア【レリック】をガジェットが発見し、輸送中のリニアレールを襲撃。それを阻止、レリックを回収するという任務でしたが、六課前線メンバー一同の活躍もあって無事に解決。

確保した刻印ナンバー？のレリックは、聖王教会にて嚴重封印中。

初任務としてはまず問題ない滑りだした、と部隊長のはやてちゃん。六課の後継人、騎士カリムやクロノ提督たちも満足されているようです、つと。

「リン曹長。」

私は名前を呼ばれ顔を上げる。

「ああ！シャーリー！」「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌を付けていたですよ。」

「ああ、なるほど。」

開いていたモニター閉じてシャーリーの側に飛んでいく。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練所の方に行ってきたんですよ。」

「そうですね、みんな元気でした？」

「はい。フォード陣も、デバイス達ももう絶好調。」

side out

「おら、いづくぞー！！」

ヴィータの声にスバルが身構える。

「うりゃああああ！」

「マッハキャリバー！」

《プロテクション》

「であああ！」

グラーファイゼンの一撃をスバルが受け止める。

「くうっ……」

「でりゃああああ！」

「うわああああ！」

しかし、少し耐えたもののヴィータに押し負け側にある木まで吹き飛ばされてしまう。

「ふむ……」

振り抜いた姿勢のままヴィータは感心した様な声を出す。

「いったた〜」

「なるほど……やっぱバリアの強度自体はそんなに悪くねーな。」

ヴィータは構えを解くとそう言う。

「あはは、ありがとうございます。」

そう言いながらスバルはヴィータの元に行く。

「あたしやお前のポジション、フロントアタッカーはな、敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。」

防御スキルや生存能力が高いほど、攻撃時間を長くとれるし、サポート陣にも頼らねーですむって、これはなのはに教わったな？」

「はい！ヴィータ副隊長！」

スバルは元気良く返事をする。

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねーように、下半身の踏ん張りとかマッハキャリバーの使いこなしを身につける。」

「頑張ります！」

《学習します》

スバルとマツハキヤリバーがそれぞれ答える。

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからな。」

そう言いながらヴィータは、手首を使ってクラーフアイゼンを一回転させると、スバルに突きつける。

「クラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったら、しっかり守れよ」

「はい！…あの少し質問して良いですか？」

「何だ？」

「ヴィータ副隊長達は何でシルバみたいに、いつもフィールド系を纏わないんですか？」

「何…？いつも纏ってるだと？それは本当か？」

「えっと…目を凝らすと、さっきのヴィータ副隊長が纏っていたのに似たやつを、シルバが纏ってる様に見える…気がするんです。」

「ふむ…」

ヴィータはその場で考え込む。

「あの…私、変なこと言いましたか？」

「ああ…いつも纏ってるなんて正気の沙汰じゃねー。普通は魔力が持たないはずなんだが…」

「じゃあ、私の気のせい…ですかね…？」

「ああ、多分な…」

そう言ったヴィータの顔はどこか晴れていなかった。

「エリオとキヤロは、ヴィータやスバル、シルバみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば…」

スフィアがフェイトに向け、ゆっくりした弾を出し、それをフェイトは避ける。

「こっやって、こんな風に。まずは動き回って狙わせない。攻撃が

当たる位置に…」

話しながら走っていたフェイトが一瞬立ち止まる。スフィアがその隙を見て攻撃するが、それをかわす。

「長居しない…ね？」

「はい！」

「これを、低速で確実にできるようになったら…スピードを上げていく。」

先ほどより速い弾をフェイトは確実に避けていく。次にスフィアから一斉に弾が出され、フェイトが煙の中に消える。それを見て息をのんだ2人に後ろから声がかかる。

「こんな感じにね。」

二人が振り向くと、いつの間にかフェイトが立っていた。

先ほどのフェイトが立っていた場所を見ると地面が抉れており、回避した道がわかるようになっていた。

「うわぁ…すごい…」

エリオが驚きの声を上げる。

フェイトはニコニコしながら話を続ける。

「今のも、ゆっくりやれば誰でもできるアクションを早回しにしているだけなんだよ？」

「はい、はい！」

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの。」

そう言うとフェイトは2人の肩に手を乗せる。

「ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートができるように。」

フルバックのキャラは、素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように。

確実に、有効な回避アクションの基礎をしっかりと覚えていこう。」

「はい！」

「キョクル！」

フェイトの言葉に、エリオとキャロ、そしてフリードが元気よく返事をした。

桃色の弾とオレンジの弾がぶつかる。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

忙しく弾を撃ち続けながら返事をするティアナの足下には、空の力ートリッジが幾つも落ちていた。

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち避けたりしてたら、仕事ができないからね。」

そう言いながら、なのはは指先に青い弾を呼び寄せる。

「っ！？バレット、レフトV、ライトRF！」

クロスミラージュに指示を出すティアナに後ろから弾が迫ってくる。

《警告》

「っ！？」

ティアナは思わず転がって避けてしまう。

「ほら、そうやって動いちゃうと、後が続かない！」

なのははそれを咎めながら、不規則な弾と青い弾を打ち出す。

《M V R F》

ティアナは不規則な弾を追う弾と、青い弾を撃ち落とす弾を撃つ。

「そう、それ！足は止めて、視野を広く！射撃型の神髄は……」

ティアナはその場に留まり、弾を次々打ち落としていく。

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして命中させる。判断速度と命中精度！」

《リロード》

なのはの言葉を引き継ぎながらティアナはリロードし、撃ち続ける。

「チームの中央に立って、誰より早く中長距離を制する。それが、私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ。」

「はい！」

「いやゝやってますねゝ」

「初出勤が良い刺激になったようだな。」

シグナムとヴァイスが4人の訓練をモニターで見ながら話をしていく。

「いいっすねゝ若い連中は。」

「若いだけあって、成長も早い。まだしばらくの間は、危なっかしいだろうがな。」

「そうっすね。あつ、シグナム姉さんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな…スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式とは勝手が違うし、剣を振るうしかない私がバックス型のティアナやキャロに教えられる様な事もないしな…」

まあ、それ以前に私は人に物を教える、という柄ではない。戦法など届く距離まで近づいて斬れ、ぐらいしか言えん。」

「ははは…すげー奥義では有るんですけど…確かに連中には、まだちいーと早いですね。」

「だから私に出来る事と言えば、経験が足りないシルバに付き合うぐらいしかない。」

「そう言えばシルバはどうしたんすか？」

「思い出したようにヴァイスが言う。」

「また懲りずに物を壊して、報告書を書いているらしい。」

「ははは…今度は何を壊したんすか？」

「洗濯機だ。なんでもレグルスを洗濯機で洗おうとしたらしい。そしたら入れられたレグルスが中で暴れて破壊したらしい。」

「…相変わらず常識知らずなことをしますね…あいつ。そろそろ部隊長の胃に穴が開くんじゃないっすか？」

「ああ、かなり多く胃薬を飲んでおられる。」

そう言うと2人は同時にため息を付いた。

ピー

「はあい、じゃあ午前の訓練終了。」

「……はあ、はあ、はあ、はあ、……」

「はあい、お疲れ。個別スキルに入ると、ちよっときついでしょう？」

訓練でかなりグロッキーになっている4人に、なのはが話しかける

「ちよっと……と言うか……」

「その……かなり……」

「フェイト隊長は忙しいから、そうしよっちゅう付き会えねえけど、あたしは当然お前等に付き合っつてやつからな。」

「あつありがとうございます……」

ヴィータのあまり嬉しくない話しに、スバルは苦笑いしながら答える。

「それからライトニングの2人は特にだけど、スターズの2人もまだまだ体が成長してる最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように。」

フェイトが少し注意をする。

「……はい！」「……」

「じゃあお昼にしよつか。」

「……はい！」「……」

7人が隊舎に着くと、はやて、リイン、シルバの3人とそれを見送りに来たシャーリーとあった。

「あつみんなお疲れさんや。」

「……はい!」「……」

「はやてとリインは外回り?」

「シルバ君も一緒ですよ、ヴィータちゃん。」

「うん。私とリインはちょナカジマ三佐と、シルバはカリムとお話してくるんよ。」

はやての言った名前にティアナとスバルが反応する。

「スバル、お父さんやお姉ちゃんになんか伝言とか有るか?」

「いえ、大丈夫です。」

「それじゃあ、はやてちゃん、リイン、シルバいつてらっしゃい。」

「ナカジマ三佐とギンガによく伝えてね。」

「うん。」

「いつてきまゝす。」

「じゃあね」

3人の挨拶が終わるとはやては車を発進させた。

おまけ

「しかし、このオンボロ大丈夫なのか?」

「なんやと!」

「大体ちゃんと運転できんのか?」

「洗濯機の使い方も分からん奴に言われとう無いわ!」

「使い方は分かる!」

「分かる奴は猫洗おうとせんわ!」

「なんだと!」

「あわわわわ」

こんなやりとりが車の中であつたとか…

個別スキル（後書き）

なのは『よく覚えておけ…管理とは成長させることだ。現状を維持することではない』

キャロ「今回もシルバ君はいません！」

フェイ「何でそんなに胸張って言うの？」

キャロ「本当は今回だけで【進展】の話を終えるつもりだったらしいですよ？」

フェイ「…なんか私の扱いがひどいよキャロ…」

キャロ「それはそうとサウンドステージやるんですかね？」

フェイ「なんか作者が『CDが無くなった!!』とか言ってたね。」

キャロ「まあ、CD探す前に【進展】終わらせろ、って話ですよね。」

フェイ「…私のキャロがどんどん黒くなってる…」

キャロ「それではまた次回会いましょう……あつたら。」

フェイ「無い可能性があるの!？」

キャロ「冗談です……多分。」

進展（前書き）

わーい、テスト期間だコンチクショー！！
勉強したくねーな…受験生だけど…orz
今回は色々伏線？的な何かがあります。
感想をもらえるとうれしいです。

進展

side シルバ

「ほな、また後で迎えに来るからな。カリムによろしく」

「はいよ。」

はやてと別れ聖王教会の中に入る。

「すいません」

「はい、なんでしょうか。」

受付の人に話しかける。

「騎士カリムに呼ばれてきたんですが…」

「お名前を。」

「シルバ・メルゼー。」

「少々お待ち下さい。」

そう言うのと近くの受話器を手についた。

「はい…そうです…えっとシルバ・メルゼー様です…はい、分かりました。」

どうやら話は終わったらしい。

「そのまま執務室に、とのことですよ。」

「分かりました。」

コンコン

「どうぞ。」

執務室のドアをノックし中に入る。

「おじゃまします。」

「はい。どうぞお掛け下さい。」

「はいよ。」

俺とカリムは向かい合うように腰掛ける。

「部隊の方はどうですか？」

「報告書の量以外は、いい感じだぞ。」

何故か俺だけ報告書が多いからな…

物を壊す所為です。

「ははは…まあ良かったです。」

「んで？世間話のためにわざわざ俺だけを呼んだ訳じゃないだろ？」
さつきまでの和やかな風陰気を消す。

「…こちらの資料を。」

カリムがモニターを出す。

「…これはいつのだ？」

「かなり古いです。確か八年前ですね。」

ふるっ…！

「…何でそんな古い資料を調べたんだ？」

「この間、あの案件の資料を集めていた時に、偶然出て来たんです。」

やはり魔力の特殊変換…か。

「…当たり前だ。」

「ではやはり…」

「ああ…生体兵器の強化パーツとして使ってやがる。」

荒ぶる気持ちを抑えて、椅子に深く座り直す。

「このデータをコピーしてくれ。六課に持って行く。」

「分かりました。」

これで六課の用件は終わった。

「さつき少し話に出たが…」

「はい。現在の所は陛下や私を入れて、6人は判明できました。ただ…」

「ただ？」

「先ほどの資料を読めばお分かりと思いますが…あの事件で壊滅した部隊に2人、いたことが確認できています。」

「って事は、実質2人か…」

やはり難しいか…

「それと一つ気になることが。」

「何だ？」

「はい。壊滅した部隊の2人の内、1人には子供が居たらしいのですが、数年前から行方不明になっているんです。」

怪しいな…

「捜査は？」

「それが全く進展していない…いえ進展させようとしていないんです。」

また分かり難い言い回しを…

「分かり易く言うと？」

「調査が実質行われていないんです。」

はい、アウト。

「レリックや母上縁の物の盗難と言い、その子供と言い…狙いは明らかに聖王関連だな。」

「その可能性が高いかと。」

丁度その時、モニターが現れる。

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました。」
もうそんな時間か…

「じゃあ、今回はこれでお開きだな。」

「はい。こちらが資料です。」

小さい端末を渡される。

「ありがとう。また進展があつたら、呼んでくれ。」

「分かりました。」

side out

和風な食事処

はやて、シルバはナカジマ2人と食事をしていた。

「こいつがお前の言っていたガキかい。」

「はい。聖王教会からの派遣…言う扱いです。」

ゲンヤの質問にはやてが答える。

「私はギンガ・ナカジマ。よろしくね?」

「俺はシルバだ。…初対面で言うのもなんだが…」

シルバがゲンヤの方をみる

「なんだ?」

「なんで黄色いネクタイなんだ?ぶっちゃけ変だぞ。」

シルバがとんでもない発言をする。

「こんの、どアホがー!!」

ドゴーン

明らかにおかしい音を出しながら、はやてがシルバの頭を殴る。

「てんめえ、何しやがる!!」

「こつちのセリフや!!何いきなり失礼なこと言つとんねん!!」

「上脱ぐとかなり気になんだよ!」

「そつやとしても普通言わんやろ!」

「大体なんだ?さつきからいい子ぶつて。そんなんだから子狸つて

言われんだよ。」

「なんやと!!」

「おい!テメー等少し静かにしろ!」

結局、最後はゲンヤの一言で静かになった。

しばらくして料理が来た。

「しっかし、旨い魚だな、これ。」

シルバが焼き魚を食べながら言う。

「おう。この店の焼き魚はミッド1旨いからな。」

シルバの言葉にゲンヤが答える。

「店の雰囲気も良いし。」

「分かってんしゃねえか、小僧。」

どうやらシルバはゲンヤにかなり気に入られたようだ。

「うん?フェイトちゃんからの通信や。」

そう言つてはやてはモニターを出す。その横で、
「これも一匹食つか?。」

ゲンヤがシルバに小魚を薦めていた。

「いいのか?」

「おう、ガキは遠慮すんな。」

「サンキュー。」

そんな会話をしているとき...

「ふう〜」

はやての通信が終わる。「何か進展ですか?」

ギンガが訊ねる。

「事件の犯人の手掛かりがちょっとな。」

そう言うとはやては席を立つ。

「と言うわけですいませんナカジマ三佐。私達はこれで失礼させて貰います。」

「おう。」

そう言うとき伝票を取ろうとするが、ゲンヤに取られてしまう。

「そんな...」

「さつさで行つてやんな、部下が待つてんだろ。」

はやてを見ながらゲンヤが言う。

「はい。ほら行くでシルバ。」

「まだ食つてんだが...」

「仕事や諦めえ。」

はやての言葉に、名残惜しそうにしているシルバを見てゲンヤが言う。
「う。」

「また今度一緒に来るかい?」

「いいのか?」

「ああ。その時やスバルも連れてこい。」

「分かった!ほら行くぞ、はやて。」

「ちよつ待ちい。それではまた。」

はやてがそう言つて2人と別れる。

薄暗い研究所で白衣を着た男が、人間の様な物が入れられたポットの並んだ通路を歩いていく。

「ゼクトとルーテシア活動を再開しました。」

奥の広間に着くと女性の写るモニターが表れ、報告をする。

「うむ。クライアントからの指示は？」

「彼らに無断での支援はなるべく控えるように、とメッセージが届いています。」

「自立行動を開始したガジェットは私の完全制御下に居る分けじゃないんだ。勝手にレリックの元に集まって行くのは大目に見て欲しいね。」

「お伝えしておきます。」

「彼らが動くならゆつくり観察させて貰うとするよ。彼らもまた貴重なレリックウエポンの実験体なんだからね。」

そう言うともニターを閉じる。

「そしてキミもね……」

そう後ろの二つの影に話しかける。

「さてどうするかな？機動六課、そして『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒト！」

進展（後書き）

シルバ「今回は作者がマジで忙しいためありません。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2703w/>

リリカルなのは 黒い月の聖王

2011年10月18日21時53分発行